

自己を見つめ互いに認め合う学級集団の育成

—道徳科の学習と日常を結びつけることを通して—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 教師力育成分野 雨宮 勇人

1. 問題と目的

1-1. 問題の所在

現行の小・中・高等学校学習指導要領において「学級経営の充実」、「ホームルーム経営の充実」が明記された。様々な変化や革新が急速に進む予測困難な時代において、一人一人の児童生徒の発達を支える視点から学級経営の充実が学校教育の喫緊の課題とされている。また、道徳教育の充実に関する懇談会（2013）においては、「道徳教育の改善・充実を図ること」が今後の時代を生き抜く力を一人一人に育成する上での緊急課題であると言及している。

学級経営と道徳教育の関連に目を向けると、文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編」では、道徳科は、「各活動における道徳教育の要」とし、「各教育活動での道徳教育がその特質に応じて意図的、計画的に推進され、相互に関連が図られる」ことの必要性が明記されている。また、文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編」においては、「道徳科の授業での指導が特別活動における具体的な活動場面の中に生かされ、具体的な実践活動の目標体験などが行われることによって、道徳的な実践との有機的な関連を図る指導が効果的に行われることにもなる。特に、道徳科の目標にある「自己の生き方についての考えを深める学習」との関連化を図り、特別活動の実践的な取組を通して、「自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度」を養う必要がある。それぞれの指導方法などの違いを十分に理解した上で、日常生活における道徳的な実践の指導の充実を図る必要がある」ということや「両者の特質をしっかりと理解した上で、それぞれの特質を生かして関連付けることが必要である」と記されている。

つまり、道徳的な実践を行うために必要な内面的資質を養うことを目的とする道徳科の学習と、道徳的な実践そのものを行うことを目的とする特別活動をはじめとする日常生活との関連を図っていくことが、学級経営の充実においても道徳教育の改善・充実においても求められるところである。

しかし、道徳科の学習と日常生活の関連について、浅見・安井（2023）は、「実際には当たり前の日常は、実はあまり意識できていないので、子供にとってはつなげにくいという現実もあります」と問題提起している。その上で、日常とのつながりを意識した学びを展開するための方法として、「普段の学校生活の様子がアルバムとしていつでも見られるようになっていくというのも一つの方法」と提案し、「日常活動が、道徳の眼を育てるとともに、道徳科の学びの中でも、そういう日常とつなげて考えられるようになっていく」と言及している。そこで必要なのが、「教師が子供のよさを価値づけ、それらの輝きを見える化すること」とし、「教師が子供の学びのモデルとなれるように、日常と道徳をつなげて考えられるようになりたい」と述べている。つまり、道徳科の学びと日常との関連とを関連付ける教師の働きかけが必要だと述べている。

1-2. 研究の目的

以上の問題の所在から、道徳科の学習と日常生活の場面を結びつけるためには、具体的な手立てが必要だと考える。そこで、本研究では、学級集団づくりへと生かすための、道徳科の学習と日常を結びつける有効な手立てを探ることを目的とした。

2. 研究の方法

(1) 対象校および児童

山梨県公立小学校第5学年児童33名（1学級）

(2) 期間

2024年5月～12月（週1回）

(3) 実施方法

①参与観察 ②授業実践

(4) 授業実践

10月～11月に道徳科を3時間

(5) 実践の評価

- ・質問紙法（実践前後の問いに対する数値の変容，自由記述の分析）
- ・ふりかえりシートの記述分析
- ・実習期間中の児童の行動観察

3. 実践の概要

3-1. 日常の掲示

本研究では、学級集団づくりへと生かすための、道徳科の学習と日常を結びつける有効な手立てを探ることを目的とした。その手立ての1つ目は、日常生活の中で、道徳の授業で考えたことと関連する場面を見つけ記録し、価値づけて掲示するというものである。これは、先述した浅見・安井

（2023）を裏付けとしている。参与観察の中で気が付いた児童の言動を記録し、価値づけて掲示していた。

図1は、掃除の時間の一場面である。教室掃除が終わらず困っているときに、他の掃除場所から帰ってきた児童が手伝っている様子を記録したものである。道徳の内容項目を観点としたときに、「親切、思いやり」、「友情、信頼」、「規則の尊重」、「勤労、公共の精神」、「感謝」、「よりよい学校生活、集団生活の充実」が考えられる。内容項目を書くのではなく、児童が多面的・多角的に捉えられるようにした。



図1 子どもの行動を価値づける掲示例1

3-2. 授業実践

学級集団づくりへと生かすための道徳科の学習と日常を結びつけるために行った手立ての2つ目は、道徳科の授業の中に経験を想起させる場面を意図的につくるというものである。児童が道徳科と日常を関連させて考えていくためには児童が道徳科で考え、議論する道徳的価値について自我関与することが必要だと考える。そこで授業の中で経験を想起させる場面を意図的につくることで児童の自我関与を促すことにした。3時間の授業実践を行った。

【1時間目】10月15日

○主題名 真の友情（B-10友情，信頼）

○ねらい 主人公の正一君に対する思いの変化について話し合うことを通して、友達を信じることや理解しようとする大切さに気付き、友達との友情を深めていこうとする態度を育てる。

○教材名 「友のしょうぞう画」（学研『新版 みんなの道徳5』）

○経験想起の場面

教材のように仲の良い友人と事情があって離れるということは、児童によって経験の差があると考えた。そこで、登場人物の心情や関係性を考える際に、事前アンケートの「距離が離れると友情関係はどうなりますか。」という問いに関わる「この場面では2人の友情関係は深くなった？浅くなった？変わった

ない？」ということを繰り返し問うことにした。事前アンケートで児童のこれまでの経験をもとに友情について考えたことをと結び付け、事前に考えたことと授業中に考えたことを比較するようにした。

○経験想起による児童の様子

場面ごとにアンケート項目を通して友情に関する経験と考えを聞いていった。ワークシートには「友だちが遠くに行っても気持ちが深くなるって変わった。」と自分の考えの変容をとらえている児童の記述がみられた。

【2時間目】10月22日

○主題名 権利と義務（C-12 規則の尊重）

○ねらい 登場人物の心情について考え話し合うことを通して、自他の権利を大切にし、義務を果たそうとする態度を育む。

○教材名 「お客様」（学研『新版 みんなの道徳5』）

○経験想起の場面

主人公はショーを楽しみにしていたが、目の前の男の人が自分の子どもを肩車したために見ることができなくなってしまう場面がある。自分の権利が守られなかった主人公の気持ちに共感できるよう、教材と似たような経験があるか想起させた。

○経験想起による児童の様子

ほとんどの児童が主人公と同じような経験をしたことがあり、その怒りや残念な思いを口にしていた。その後、肩車をした男の人へと立場を変えて気持ちを考えることで、子どもにショー見せてあげたいという気持ちを考えることにつなげた。主人公だけでなく、その場にいる人みんながショーを見る権利があり、楽しみにしているというところにつなげた。しかし、だからといって権利の主張だけをするとどうなるのか、果たす義務はないのかという、本時のねらいにせまる部分を考えていった。

【3時間目】11月5日

○主題名 みんなのためにできること（C-16 よりよい学校生活・集団生活の充実）

○ねらい えり子の心情の変化について話し合うことを通して、様々な集団の中での自分の役割を自覚して集団生活の充実に努めようとする態度を育む。

○教材名 「森の絵」（学研『新版 みんなの道徳5』）

○経験想起の場面

教材を読み、やりたい役ができず、そのためやる気がないわけでもないのに筆を持つ手に力が入らないえり子の心情を考える場面で、児童にも似た経験はなかったか想起させた。そこから心情が変化していったえり子への共感や「どのようなことを考えれば、それでも役割を果たすことができるのか」という中心発問での自我関与につなげた。

○経験想起による児童の様子

児童は学校生活の中で様々な役割を持っている。授業の中で「えり子のように役割を決める際に、自分の望んだ役ではないものになるという経験はある？」と問いかけたところ、ほとんどの児童が経験していることがわかった。さらに、「やる気がないわけではないのに力が入らないというえり子の気持ちには共感できる？みんなも同じような経験はある？」と問いかけると、ほとんどの児童が経験し共感していた。そのような経験を想起することから、えり子やえり子のクラスの仲間の考え方や生き方をもとに、「えり子のようなことに直面したときにどのように考えれば乗り越えられるか」ということを考えることにつなげていった。

3-3. ふりかえりシート「おむすびシート」の活用

学級集団づくりへと生かすための、道徳科の学習と日常を結びつけるために行った手立ての3つ目は、

「おむすびシート」というふりかえりシートを用いることだ。「おむすびシート」は、児童が道徳科の学習をふりかえりながら、日常生活の中にある道徳的な価値ある言動を見つけていき記入していくものである。児童が自己をみつめ、他者のよさに気づくことをねらっている。(図2)

具体的な構成としては、上段に板書による道徳科の学習の記録を載せる。左下には

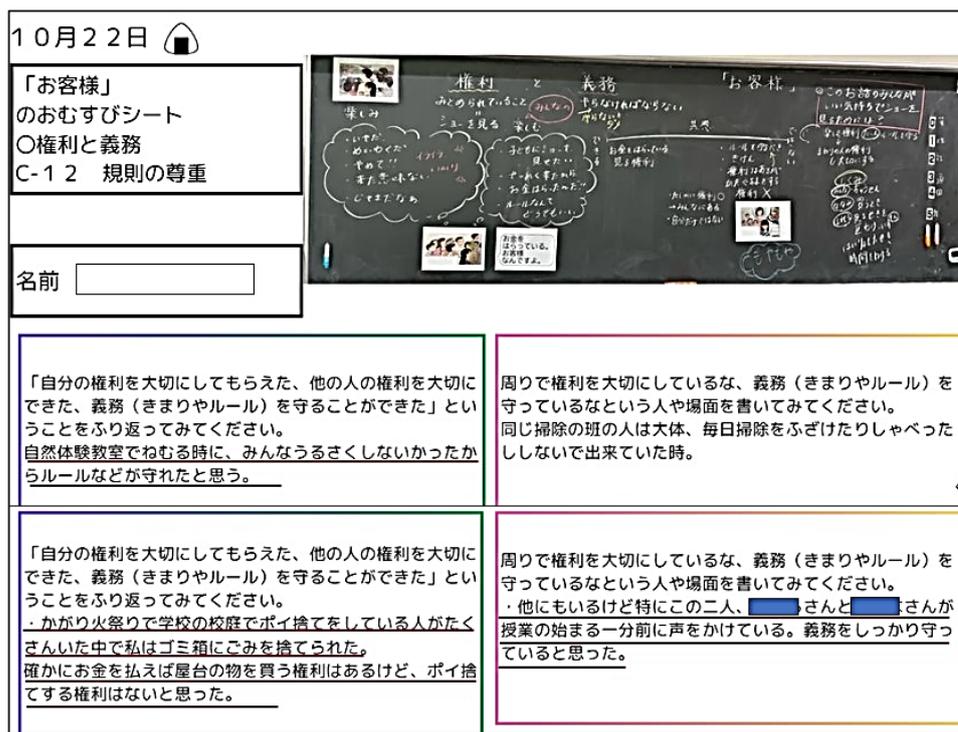


図2 「お客様」の「おむすびシート」の例

授業で考えたことを視点として、日常生活の中での児童自身のふりかえりを記入する。右下には授業で考えたことに関わる級友や集団のよさを日常生活の中から見つけて記入する形となっている。一人一台端末を活用し、各々のタイミングで記入できるようにした。また、端末の活用により、他者参照がいつでもできるようにした。

3-4. 道徳通信「むすび」の発行

授業実践のあとに「おむすびシート」をいつでも記入できるようにしていたのだが、児童の自主性に任せた分、記入する児童が固定化されるとい課題や自分のシートに記入しても他者参照をしている様子があまり見られないという課題が生まれた。そこで、「おむすびシート」の記述内容をまとめた道徳通信「むすび」を発行した。(図3) 道徳通信「むすび」を教師が紹介し、掲示することで、まだ記入

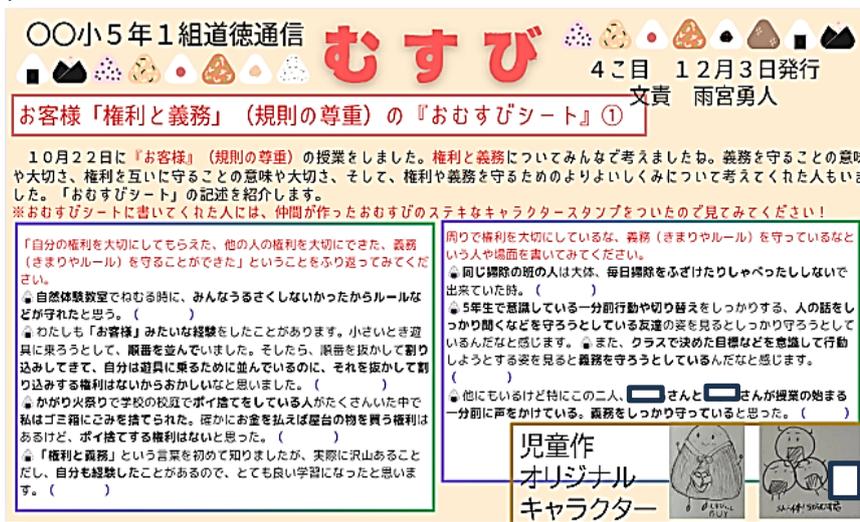


図3 道徳通信「むすび」の例

していない児童の意欲喚起や互いの記述内容を共有することをねらった。また、さらに児童が「おむすびシート」や道徳通信「むすび」に目を向けるために、児童に「むすび」に関わるオリジナルキャラクターを作成してもらい、教師が見た「おむすびシート」や道徳通信「むすび」に載せることでさらなる意欲喚起を図った。

3-5. 3つの手立てをむすんだ掲示

図4は、3-1に示した日常の掲示の1つであるが、3-2に示した授業実践を行った内容項目である「友情、信頼」、「規則の尊重」、「よりよい学校生活、集団生活の充実」を視点として、日常生活についての児童の参与観察を行った際に撮った写真から作った掲示物である。掃除の時間に、当番にはない机の脚の裏をきれいにする児童が現れた。そこに他の掃除場所から帰ってきた別の児童が机を持つという手助けをしたという場面である。ここでは、教師の価値づけではなく、「おむすびシート」に書かれた児童の記述から価値づけを行った。児童同士が互いに認め合っていくためには、教師の価値づけから児童同士の価値づけになっていくことが望ましいと考えたためである。日常の道徳的に価値ある言動を写真として記録し掲示するという手立てと、授業実践と「おむすびシート」による児童のふりかえりを一つに結ぶことができた。

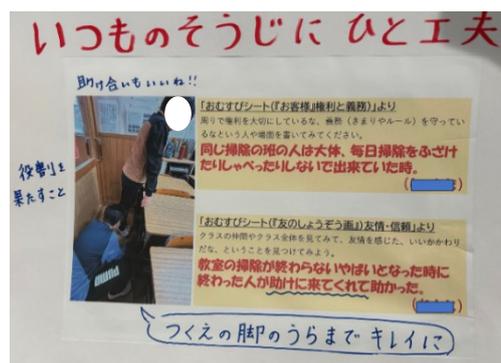


図4 3つの手立てをむすんだ掲示例1

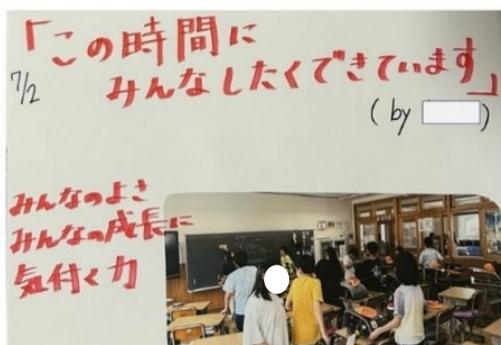


図5 子どもの行動を価値づける掲示例2

4. 実践の結果

4-1. 参与観察から

図6は、児童に促されて撮った写真である。参与観察の中で、ある児童から「先生、今写真撮らないんですか？」という声をかけられた。「どうして？」と聞くと「みんな掃除が終わったらすぐにしたくてしているから」という返事が返ってきた。この児童は、学級の中の価値ある姿に気付き、記録に残すように依頼してきた。この児童の発言から、教師が児童の価値ある行動を記録し見える化したことで、児童の意識の変容につながった可能性が伺える。

4-2. アンケートの結果から

実践の前後で児童にアンケート調査を行った。表1が実施したアンケートの項目である。

表1 アンケートの項目

事前アンケート (9月30日実施)	
1	出席番号を記入してください。
2	道徳の授業は好きですか。(好き どちらかというとき どちらかというときではない すきではない)
3	2で答えた理由を教えてください。(記述式)
4	道徳の授業で、ほかの人の考えに「いいな」「なるほどな」と思うことはありますか。(とてもある ある あまりない ない)
5	道徳の授業の中で、日常生活と結び付けて考えることはありますか。(よくある ある あまりない ない)
6	日常生活の中で、「道徳の授業で考えたことだ」と結び付けることはありますか。(よくある ある あまりない ない)
7	「よくある」、「ある」と答えた人に聞きます。それは、どのような場面ですか?できるだけ詳しく教えてください。(記述式)
事後アンケートに付け加えた内容 (12月10日実施)	
8	「おむすびシート」で、友達の書いたことをどれくらい見ましたか。(よく見た 見た 少しだけ見た 見なかった)
9	「おむすびシート」は、道徳の学習をもとに、自分のことを見つめなおすことにつながったと思いますか。(とても思う 思う あまり思わない 思わない)
10	「おむすびシート」は、道徳の学習をもとに、クラスの仲間と認め合うことにつながったと思いますか。(とても思う 思う あまり思わない 思わない)
11	道徳通信「むすび」は、クラスの仲間と認め合うことにつながったと思いますか。(とても思う 思う あまり思わない 思わない)
12	最後に、雨宮先生の道徳の授業や「おむすびシート」、道徳通信「むすび」について感想を書いてください。(記述式)

図8, は設問9に対する回答結果である。83%は自己を見つめなおすことにつながると回答しており, 多くの児童にとって自己を見つめなおす手立てになっていたといえる。

図9は設問10, 図10は設問11に対する回答である。

「おむすびシート」については89%, 道德通信「むすび」については86%が互いに認め合うことにつながったと回答している。

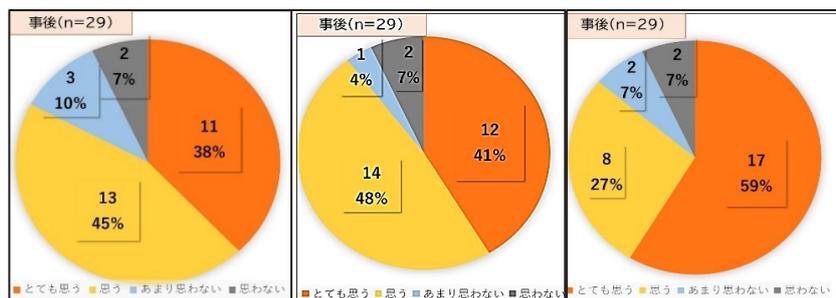


図8 設問9に対する回答 図9 設問10に対する回答 図10 設問11に対する回答

図11は設問12の記述から「おむすびシート」に関するものを抽出し樋口

(2014)のKHCoderを用いて共起ネットワークを作成したものである。「自分, 人, 見る」を関連づけた記述や「友達, 気持ち, 分かる,」を関連付けた記述, 「クラス, 深まる」を関連付けた記述が表出した。表2は, それらの言葉が含まれている児童の記述である。「おむすびシート」によって, 自己を見つめることや他者と認め合うことにつながり, クラスの仲が深まった

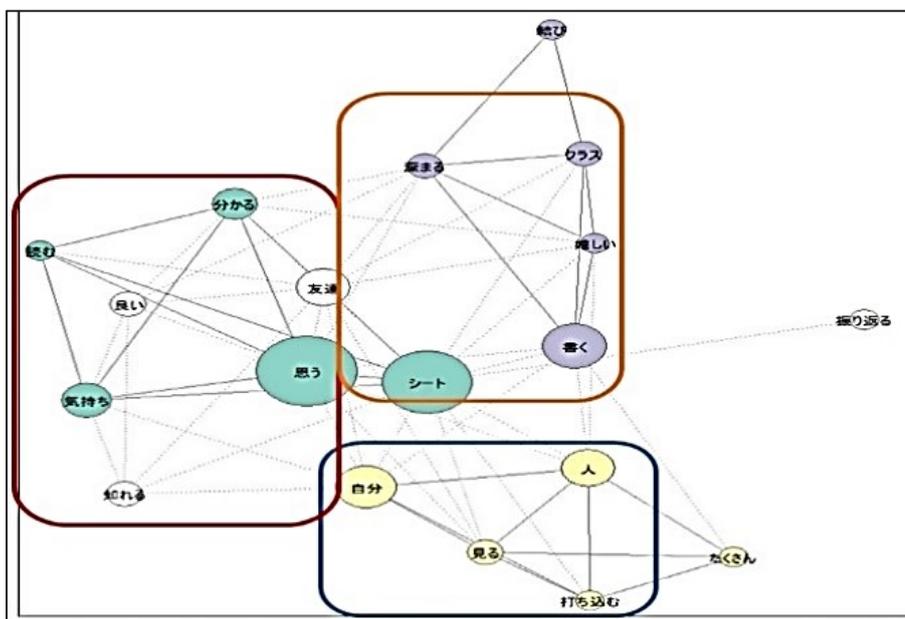


図11 樋口 (2014) のKHCoderを用いた共起ネットワーク (設問12「おむすびシート」関連)

という実感があったことが伺える。

表2 設問12に対する児童の回答 (原文まま)

自分のやったことが人のためになったことを書いてくれるのがありがたい。
「おむすびシート」では, 自分のいつもの生活を見直せたり周りの人のいいところに気付いたのでよかったですと思います。
日常であったむすびが知れて, 「この日はこういわれてうれしかった」や「役割を果たせた」などの気持ちが感じられてとても良いと思いました! みんなの気持ちが知れたり, 自分の気持ちを確かめたりできて, 楽しかったです。
お結びシートいいと思いました。それでクラスの仲良しのわが, 深まると思いました, それでクラスの書かれたほうも「〇〇さんに私いいことしたなー」って思うし, 「〇〇さんにいいことされてうれしいなー」って思いました。

表3は, それらの言葉が含まれている児童の記述である。「おむすびシート」と同様に他者について知る機会となっただけでなく, 道德通信「むすび」によって「おむすびシート」では気が付かなかった他者の生活の様子やよいところを知る機会になったと思われる。

表3 設問12に対する児童の回答 (原文まま)

クラスのみんなが助けたことや助けられたことが書かれてて自分が知らないところでもみんなの活躍が知れてよかったです。
道德通信「むすび」では, 他の人の「おむすびシート」の内容が書いてあって, 友達の「おむすびシート」を少ししか見ないから, 「むすび」で見て, 友達が自分のことを書いてくれたのがあったら, とてもうれしく感じるし, 友達の普段の生活であった出来事などを知れるので, とても良いと思いました。
道德通信「むすび」については, 休み時間に見たりすることが多くて, 「こんなやったな」や友達の考えが載っているの, 共感してみたりして, 道德通信もためになりました。

5. 全体考察と今後の課題

これらの結果から、それぞれの手立ての成果と課題について考察していく。

まず、日常生活の価値ある言動の記録を掲示することの成果については、教師が児童のよさ、価値ある言動を見つけようという意識の高まりが挙げられる。掲示物を作成するということが、教師が児童を見ることと、そこにどのような価値があるのかを考えることにつながった。さらに、掲示物を継続して作成したことにより、価値ある言動に目を向けようとする児童が表れたことは大きな成果だと考える。このような目が児童に育っていくことで、掲示物を教師が作るのではなく児童が作るという活動に発展することが可能になっていく。それは、教師の価値づけによる学級集団づくりではなく、児童が主体となった学級集団づくりへとつながる。また、3つの手立てを網羅した掲示物を作成することができたことも大きな成果だと考える。それぞれが独立した手立てではなく、関わり合っていくことで教師による価値づけではなく、児童同士が互いに価値ある行動を見つけ合うことができるようになるだろう。そのような姿は、互いに認め合う学級集団へとつながっていくだろう。

次に「おむすびシート」や道德通信「むすび」については、日常生活で授業に関する具体的場面を想起するきっかけになった。自分では気が付かなかったよさを他者に見つけてもらう機会が増加したといえる。自己を見つめなおすことや互いのよさや努力に目を向ける、知るきっかけになった。道德通信「むすび」は、基本的には他者参照を児童の自主性に任せながら、児童がどのような記述をしているのかを全員に知らせていくことができる。そこに学級の実態に応じて教師や児童の価値づけを意図して組み込むことができれば、単なるふりかえりではなくより、道德科の学習と日常を結ぶことができ、学級を発展させていくことにつなげていくことができる。以上のことから、本研究の実践は、自己を見つめ互いに認め合う学級集団の育成への手立てとしての有効性を得られたと考える。

今後の課題については、道德科の授業の中で経験を想起することはできたが、ただ経験を想起するだけにとどまることなく、そこから自我関与しながら道德的価値に結び付けていくことだ。そのためには、自分のあらゆる経験だけでなくそのときに感じた本音を語り合える集団でなければならない。経験を想起しながら道德科の中で本音や内面の深い部分を語り合っていくことが、認め合う学級集団の育成へとつながっていくと考える。また、「おむすびシート」へ進んで記述することや他者参照をうながす働きかけが必要である。道德通信「むすび」と関連した学級集団づくりへの活用法も検討の余地がある。大切なことは、これらの手立てが、児童の個性が活かされた、児童の出番や居場所になっていくことだと考える。

本研究は、短期間の授業実践を通し、道德科の学習から手立てを探る実践を行った。しかし、本来学級集団づくりは、年間を通して行っていくものであり、学級集団づくりと道德科の学習は相互に関連し合っていくべきである。今後は、年間を通した道德科の授業づくりと学級集団づくりをむすびつけた実践の積み重ねを行い、本研究のテーマである「自己を見つめ互いに認め合う学級集団の育成」についての研究をさらに深めていきたい。

6. 引用文献

- ・道德教育の充実に関する懇談会（2013）「今後の道德教育の改善・充実方策について（報告）～新しい時代を、人としてより良く生きる力を育てるために～」頁3
- ・文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科道德編」頁10
- ・文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編」頁37-38
- ・浅見哲也・安井政樹（2023）『道德授業の個別最適な学びと協働的な学び ―ICTを活用したこれからの授業づくり―』明治図書 頁168-169